

概説・蘇格蘭土史

富 田 光 行

「山椒は小粒でも、ぴりりと辛い」といふ格言があるが、「ネルソンの百科辞典」(NELSON'S ENCYCLOPAEDIA)といったならば、知る人は、あの小型な25冊もののことを思ひ出すであらう。それは、見るからに、貧弱であるが、可愛らしい感じもする。

私がこの辞典を入手したのは、あの港都・神戸で、昭和18年(1943年)頃であったと思ふ。それから、殆ど手に触られずに、40年近くも経ってしまっていた。

偶々、私は小著「ロバート・バーンズの生涯と思想」(Robert Burns: His Life and Thoughts) [1978年発行。日英両語。261頁]を出版することになって、初めてこの辞典を開くことになった。ところが、それはその外見甚だ貧弱なるにも拘らず、簡約・手頃で、その内容が如何に豊富であるかに、驚かされてしまった。

さて、英國(The United Kingdom)の歴史に関する書物は豊富でもあり、入手もし易いが、然し、「あの奥まった小さい國・蘇格蘭土(スコットランド)」については、少くとも日本では、殆ど見られないのではないか。そこで、私は従来、蘇格蘭土には、特別な関心を抱いてゐるのであったから、著書に直接関係ある箇所・蘇格蘭土の「母國語と文学」を引いてみて、その簡にして要を得てゐるのに感心した。そして、今回執筆の小著に関する「埋め草」にとり上げたのが、その歴史篇である。

今更言ふまでもないことなのであるが、あの美酒・スコッチ、郷愁の布地・ツイード、何びとの詩情にも甘く哀しく適合する民謡、民話等々は遙かなる國日本の我々に取っても、今なほ日常生活には欠かせないものを造り、供し、潤す物心両面の関係があつて、見捨てがたい國ではある。あの夢多く「王デヴィド(David: 1084-1153)の下、

蘇格蘭土はヨーロッパに於ける最も栄えつつある國々の一つであつた」と語られる、まさに、その蘇格蘭土は、将来も尚期待出来る國であつて、その歴史を繙くことは必ずしも無意味ではなからう。

さて、この辞典は、その序文に於て、編者達の提唱として、次の如きものを掲げてゐる。(1)使用の簡便なること、(2)参考の容易なること、(3)現状に適應させること、(4)正確・信頼のおけること、(5)研究への指針たること、等。[一般の讀者は「蘇格蘭土」といふ音訳(transliteration)に興味も愛着もないであらうと思はれるので、以下に於ては、「スコットランド」と片仮名をもって充てることにしよう。]

スコットランドの記録に残る歴史は紀元後、80年に、ローマの將軍Julius Agricolaの侵略から始まる。何故ならば、彼はForth河の南方にあるその地方全域を征服し、またその正確な位地は不明である Mons Crampius と呼ばれる地点に於ける一大勝利によって、同河の北方領土を相伝するところの民族・カレドニア人達の權力を破壊してしまつたからである。

これら北方の諸民族に置かれた牽制施設として、彼はForthとClydeとの間に一連の城砦を、紀元後、81年に構築した。北部ブリトン(これは、Cheviot 丘地の北部にある地区がローマ人達によって、さう呼ばれてゐるのであるが)の占領は紀元410年まで、断續的に支持されたが、それは兵力による占領以上には決して越ゆることはなかつたし、またローマ人達は道路・兵舎・石碑・貨幣より多くは殆ど彼らの勢力を示す跡を残さなかつた。

ローマ人達の出発一世紀半後頃に、我々はこの

國土が主として四つの國民達——ピクト族・スコット族・ブリトン族・アングル族の所有となつてゐることに気がつく。ピクト族は、その起源が尚議論の種となつてゐるが、Forth 河の北方にある地域を占領し、そしてブリトン族（ブリソン・ケルト族）は Clyde 河の溪谷に沿つて、Dumbarton に於ける彼らの城砦から伸展し、そして南は遠く Cumberland までに及ぶ Strathclyde として知られる地域を占有した。

これら二つの國民達が如何ほどの期間にわたつて、それら相互の領地を占有してゐたかは決定されてはゐないが、然し、この新時代に早く、アイルランドから到着し始め、そして現在の Argyll と隣接の諸島に恒久的な足場を獲得した。この地方に彼らは Dalriada という名称を與へた。

半世紀後に、アングル族（チェートン族）は、彼らの支配者 Ida の下に、東部海岸に一つの王國を建てたが、それは Bernicia という名称で、その主要な本據として Bamborough の城砦を以て、Tees 河から Forth 河の河口にまでに進展して行った。

同世紀（588年）の終末前に、Deira の王國は、Tees 河から Humber 河までに拡がって、Bernicia の王國に附加され、これら二國が、Northumbria を構成したのである。これら四つの民族達に於ける最後の合同からして、現代のスコットランドが発生した。

これら民族間に於ける覇權獲得の闘争史に於ける一つの決定的な事件は563年頃、Iona の聖 **Columba**（521—597）による上陸であつた。二つの偉大なる結果が **Columba** によって、達成された。つまり、彼は Dalriada のスコットランド王國を統合固定し、そして彼はピクト族にキリスト教を授けたのである。

幾分後になつて、聖 **Mungo**（518—603）・別名 **Kentigen** は **Columba** がピクト族になしてゐた物事を Strathclyde のイングラント王國にしたのである。そして、次の世紀に、先づ Iona（アイオナ）〔スコットランド南方・ヘブリデーズ諸島中の一つ〕の宗教が、そして次（664年）に、ローマのそれが、Northumbria へ導入された。

キリスト教に於けるこれら二つの形体が存続する限り、それら對抗的な民族の間に、分離といふ

障害があつた。第八世紀の初期に、この障害は除去された。710年に、ピクト族の王 **Naitan**、別名 **Nectan** がローマの宗教を受け入れ、そして二・三年後に、Iona と Dalriada（Argyllshire の旧名）とが彼の範例に追隨した。かくして、すべて四つの民族達はローマの優位を承認し、そしてその方向は将来の統一に対して明白にされた。

当初、アングル族は有力な皇子達——**Aethelfrith**、**Edwin**（その名前はエデンバラに保存されている）、と **Oswald** と **Oswiu**——がそれら三つの民族を支配する宗主權を確立した。然しながら、Pictland の侵入に當り、彼らの別な一人の王 **Ecgfrith** は、Nectansmere——Forfarshire の **Dunnichen** と同じであるとみなされるが——に於て、あのやうに圧倒的な敗北（685年）に耐へたので、Northumbria の威力はその瞬間から傾き始めた。

すべてその隣人3名によって、悩まされてゐたので、**Strathclyde** は当初恐るべき相手であつたやうには決して見えない。それは **Dalriada** と **Pictland** とについては、別であつた。**Donald Breac** の下で、その最も勢力的な支配者達の一人 **Dalriada** が特に重要な役割を演じたのである。然し、アングル族との戦（642年）に於ける彼の敗北と死とによって、それが衰退して種族の分裂となり、そしてブリトン族とピクト族との支配下に倒れてしまった。

これら三つの敵対國が、かやうにして無力となつてしまつたので、ピクト族は未来のスコットランドに於ける境界内で、その支配的な地位を占め始めたのである。彼ら王達の中で一人・**Constantine** 一世（789—820）がその宗教上の中心点を Iona から Dunkeld へと移し、かくしてピクトとスコットとのために、一つの教会の首都を確立した。それから、Dalriada の王 **Alpin** の息子・**Keneth** はピクト・スコット連合國の支配者となつたが、彼らはその後決して一つの民族としての他は話に出されてはゐない。

Strathclyde はイングラントの王 **Edmond** の同意を得て、**Malcolm** 一世（942—954）によって、学芸を仕込まれたと言はれてゐる。遂に、**Malcolm** 二世（1005—34）は、Tweed の Carham 合戦に於て、彼をして Lothian の首領となさしめる勝

利を得、それをスコティアの王國に所属させるのであって、——といふのは、今日まで、アイルランドに適用されるその名称によって、ピクト族とスコット族との連合領土が今や特に指名され始めたのである。

Carham に於ける **Malcolm** の勝利は明らかに國史に於ける最も決定的な事件として見なされるかも知れない。Pictland と Dalriada と Strathclyde とは一王君の支配下にもたらされてゐて、Lothian の追加は現代スコットランドの版図を殆ど完成させてしまった。〔Carham に於ける勝利の年に、**Malcolm** は Strathclyde を非常な降服状態に低下させてしまったので、この地域からは、それ以上の紛争は発生しなくなった。〕

スコットランドの王達が自分らの權威を維持することに最大なる困難を見出したのは、彼らの原始領土に於ける Forth 河の北方へのであった。その困難は二つの源泉から発生したのである。王家の論争が屢々なる反乱を来したが、それに対して、唯一層多く活発な支配者達のみが首尾よく抗戦することが出来るに過ぎなかった。Moerne(現在の Moray) の地方はその権利を Alba の君主に向ひ、幾世紀にも互って争ったところの或る家族によって支配された。もう一つまた別な方向から一つの同じやうな重大なる危険が生ずる恐れがあった。

第九世紀に於て、ノールウェーの族長達が Orkney 諸島に、Caithness に、そして Sutherland にさへも、一つの足場を獲段してしまつてゐたし、またやがてスコット族の諸王達には恐るべき競争者となった。これら源泉の方向から発するところの危険が王 **Duncan** (1034—40) の運命に於て説明されてゐた。**Thornfinn** との戦闘に於て、ノールウェーの領主 **Duncan** は海陸両方によって敗北させられ、そしてその供給源が停止されてしまつた。

Moerne の支配者 (Mormaer) **Macbeth** は **Duncan** の柔弱に附け込んで、一揆を起し、Elgin の近く、Bothgouanan に於て、彼を敗北させて且つ殺害 (1040) し、そして王として我が地位を占めた。

Malcolm 三世 (Canmore) は独特な個性をもって、公然と戦つた最初のスコットランド王である。1066年に、ノルマンディーのウィリアムによるイングランドの征服が古代イングランド諸王の後継

者 **Edgar Atheling** とその妹 **Margaret** とを駆つて、スコットランドに避難を求めさせるのであった。

Malcolm は **Margaret** と結婚をし、そしてこの合体が目すべき結果となった。それはスコットランドに於て **Margaret** の同胞中多数を定住することに到らしめ、そして **Malcolm** に、イングランドの侵略をしばしばせしめたが、然し、その最後になって、彼は破滅的に敗北し、そして殺害された。就中、女王 **Margaret** はその子孫達によって根気よく実行され、そして封建制度の導入と共に、つひにはスコットランドにキリスト教國に於ける他の王國に係る体制を與へるところの宗教政策を始めたのである。

Malcolm が死ぬや否や、その弟 **Donald Bane** は **Margaret** の息子達をこの王國から追放し、そしてその王位を占めた。六ヶ月にして、彼は先妻による **Malcolm** の息子 **Duncan** によって駆逐された。一年以内に、**Donald** はその競争者を敗北させ、そして殺害し、そして **Margaret** の息子 **Edmond** との協定が成立した。その協定は **Donald** が Forth 河の北方まで、そして **Edmond** は南方まで統治すべきであるといふことにあり、かくして、**Lothian** と **Alba** との古い分裂を修復した。

これら二人の王達は三年間統治してしまつてゐたが、それから **William Rufus** によって補給される軍隊の援助によって、**Margaret** のもう一人別な息子 **Edgar** が前記両者を敗北させ、そして再びこれら二つの王國を合併させた。そしてそれは決して二たび分離させられることはなかった。十年 (1097—1107) の治世後に、**Edgar** はその弟達・**Alexander 一世** (1107—24) と **David** (1124—53) とによって相續された。自分の遂行することが出来るところの革命——宗教上・そして政策上の——によって、自分の王國に **David** が與へたところの一致団結によって、その國民が従ふべき方針を決定した。

彼の治世に於ける大部分はイングランドに於ける戦争によって占められてゐた。Northumbria に於ける **Siwald** の孫息女 **Matilda** との結婚によって、彼は Huntingdom の名譽、その治世中 Northampton 伯爵位、また Northumberland 伯爵位を獲得した。その姪 **Maltida** と **Stephen** との間に

於けるイングランドの内乱はその姪がもつ権利のと彼自身もつ要求権利のとの支持に於て、イングランドを侵入することの口実を彼に與へたのである。

この干渉に於ける最も顯著な事件は1138年に於ける Northalleton (Standart の会戦) に於けるその敗北であった。然も尚、彼の努力による結果として、彼は Northumberland の伯爵領を維持し、そしてそれを彼はその次子 **William**・後の **William the Lion** に與へた。然し、**David** をスコットランド諸王の名表中かくまでも高く置くのは、彼の自國に係る政策であった。

この政策に於ける顯著な事実はノルマン・スコティッシュ・デンマークの血統をもつ人々に國土を譲渡することであつて、これらの授與はこの國に於ける支配民族を取り替へるほどの規模で行はれたのである。**David** 治世の末期に於て、スコットランドはその他キリスト教諸王國に似た封建國家であつた。**David** に於ける他の偉業はその國家宗教をローマの範例に同化させることであつて、その過程にはケルト民族のもつ宗教觀念の代表たる Culdees (修道士の友愛団体) の廃絶が含まれてゐた。

それら四つの主教管区 (St. Andrews と Glasgow と Dunkeld と Moray) に、**David** はもう五つ——Ross と Aberdeen と Caithness と Dunblane と Brechin とを加へたのである。教会へに対する彼の寛容に関する触知できる記念物はまた Kelso と、Melross と、Newbattle と、Dundrennan と Kinloss と Cambuskenneth と Holyrood と Jedburgh との大修道院であつた。彼の業績目録には尚更に彼が自治都市の發展に與へた起動力が加へられねばならない。その天然資源に比例して、**David** 下のスコットランドはヨーロッパに於ける最も榮えつつある國々の一つであつた。

イングランドはその隣接王國の増加して行く資源を驚愕して熟視すべき充分な理由があつたし、またイングランドの王達は彼らスコットランドの同代者達の權力を縮小させるといふ慎重な政策を採用した。王位に彼を継承した **David** の孫息子たる **Malcolm 四世** (かの Maiden) から **Henry 二世** がスコットの王によって当然に要求された北部イングランド諸州を無理に要求し、そして彼 (王ス

コット) には Tynedale と Huntingdon との「名誉」を残しておくことに過ぎなかつた。

Malcolm の後継者 (1165—1244) **William 一世** (Lion) は自分自身のものと考へてゐる Northumberland を侵略してゐる間に、Alnwick で捕へられ、そして **Henry** をスコットランドの最高王者として承認せざるを得なくなつた。彼自身の王國に於ても、また **William** は Galloway と Scotland と Caithness とにある不平不満な臣下達について、深刻な困難をなめた。然しながら、つひに、彼は彼らを全部征服した。一万マークという金額で、イングランドの **Richard 一世** は **William** の領土を越えて、Tweed (1189年) に至るまでその宗主權を明け渡したのである。

Alexander 二世 と **Alexander 三世** との治世 (1214—85) に亘つて、スコットランドは國家の發達に於けるあらゆる方面に沿つて、着実な前進をなした。**Alexander 二世** の主な業績は Moray に於ける反乱の鎮定と Moray のやうに長い間困却を及ぼしてゐた Argyll の征服とであつた。然しながら、もっと重大なのは、彼の息子であり且つ後継者である **Alexander 三世** (1249—85) によつてなされた征服であつた。

Edgar の治世に、Norway の王 **Magnus Barefoot** は西部諸島 (つまり、それらがその当時呼ばれてゐたやうに、Suderey 諸島) の譲渡を強要してゐた、そしてその日以来これらの諸島はスコットランドの王國にとっては恐るべき隣人となつてゐた。Norway の王 **Haco** はこれらの諸島に対するわが要求を再度主張し、そしてスコットランド國王に一撃を加へるために、一大軍備をもつて、スコットランドに航行した。彼は Largo の会戦 (1263) で一つの牽制を受け、彼の艦隊は嵐によつて奪はれ、そして Norway に歸る途中に Kirkwall で死んだ。

この征服事業はかやうにして、容易ならしめられ、かの Hebrides と Isle of Man とはスコットランドに附屬されることになり、**Alexander** はそれら西方諸島に対する賠償金を支拂ふのに同意した。**Alexander** の死後、打ち續く不幸と悲嘆との時代を通じて、彼の治世はスコットランド國の黄金時代として見られるやうになつてしまつた。

その死に臨んで、**Alexander 三世** の唯一人生き

残りの代表は「**Maid of Norway**」・**Margaret** だけであった。この王國に於ける諸事務を処理するやうに任命された摂政政治によって、彼女はイングランドの **Edward 一世** の後継者に嫁すべく協定されたが、然し、その帰國の途中で彼女は **Orkney** 諸島で死んだ。

この空白王位に対して、12人の候補者より少ないことはなかったが、然し、彼らの中で、わづかに3人だけが真剣な主張（要求）をもってゐるものと考へられることが出来るに過ぎなかった。これらは、**William Lion** の兄弟 **Huntingdon** の伯爵 **David** の長女が生んだ孫息子 **John Baliol** と二女の息子 **Robert Bruce** と三女の息子 **Henry Hastings** とであった。これら申請者達の同意をもって、スコットランド王位の裁定は **Edward 一世** に委託された。そこで、彼はスコットランドの最高君主として、皆に承認された。

Berwick の城内で(1292年11月17日)、**Edward** は **Baliol** に味方する彼の判断を下し、そして、自分の王冠を辞退した。何故ならば、その裁定はイングランドの宗主権を暗示してゐるからであった。**Baliol** はその隷属状態下に於て、苟立ち、謀叛をし、敗北し、わが王位を辞退せねばならなかった(1296年)。その時から、スコットの王はあるべからずと彼の征服者は決め付け、知事、出納官、また當國の事件を管理するために、司法官を任命した。

この配備は、**William Wallace** の覇権下に於て、スコットランド人が反乱に立ち上り、**Stirling** に於て、イングランドの軍隊に決定的な勝利を納めた頃、一年と持ち堪へることはなくなってゐた。その翌年、**Edward** は本人自らスコットランドに入り、**Falkirk** に於て、**Wallace** の軍隊を打ち破り、もう一度自國の主宰となり、最も重要な要塞を守備することによって、その支配権を固守したのである。

また、もう一人別な救助者がその申請者には孫息子になる **Robert Bruce** に於て立ち上るのであった。1306年充分には確認されてゐない状況に於て、**Bruce** は **Dumfries** にある **Minolite** 修道院の礼拝堂に於て、**John Comyn** を殺害した。**Comyn** はイングランドの利害を代表してゐて、それで **Bruce** は、かやうにして彼が恐らく長い間見つめ

てゐたその小徑を強いて辿らされた。彼は1306年 **Scone** に於て、自ら王冠を戴き、スコットランドの完全独立を来すことになるあの生涯を始めたのである。

彼の事業は1307年に於ける **Edward 一世** の死とその後継者がもつ薄弱な性格とによって、促進された。1313年までには、その侵入者が所有する唯一の要塞は **Stirling** の城となつてゐたし、またその翌年には **Banockburn** に於ける **Bruce** の意気揚々たる勝利が **Stirling** の運命と王國の運命とを直に決定したのである。

國內が今や平定されたので、**Bruce** はイングランドの組織的な・計画的な侵入による報復的な政策を始め、彼の頼みになる二人・かの「善良なる」**Sir William Douglas** と **Thomas Randolph** (後に、**Morary** の伯爵)とが、戦争に関するスコットランド的な方式に於て、特に傑出してゐた。イングランドに於けるもう一つまた別な打撃として、**Robert** の弟 **Edward Bruce** がアイルランドへ武器を持ち込み、それで1316年にその王君であると事実上要求されたが、然し彼は二年後に、**Dundalk** に於けるイングランドとの戦争で殺害されたのである。

イングランドは1328年、**Northampton** の條約に於て、スコットランドの独立を承認せざるを得なくなった。**Bruce** はその翌年に死んだ。彼の治世には、またスコットランドの憲法史上最も顕著な事実が属してゐる。1326年に、**Cambuskenneth** に於て、第一回スコットランド議회가名実共に開かれた。

今までのところでは、唯一層有力な男爵達と一層高級な牧師達とのみが國家の慎重な議會を構成してゐたが、然し **Cambuskenneth** に於て、初めてそれら自治都市から選出された代表者達とその進行に參與することになった。**Robert 一世** は彼の息子 **David 二世** (1329—71)、つまりイングランドの **Edward 三世** によって相續され、**David** の若きを利用し、**John Baliol** の息子 **Edward Baliol** を従属君主として、父の王位に就かせることに暫らくは成功した。

Baliol は結局見捨てられてしまった。然し、イングランドの侵入に當つて、**David** は敗北し、1346年に **Neville's Cross** に於て投獄され、そし

て我が王國の資源に重税を課した賠償金の支払で、その後十一年に、わが自由を回復したに過ぎない。スコットランドへ戻るや否や、彼はイングランドとの秘密條約に入った我が父の息子として、名譽を汚してしまつたが、そのために **Edward 三世** の息子は長男を除いて、誰もスコットランドの王として、彼を相續することが出来なくなつてしまつたからである。

この盟約は効を奏さなかつたが、それでも **David** の死んだ時、尚スコットランドはそれが **Norhampton** の條約によって得ておいたところの独立を尚維持したのは、スコットランド議会の憤然たる抗議によるものであつた。

スコットランド國王の新なる系図は **Bruce** の娘 **Marjory** の息子 **Robert 二世** から始まる。高級管理者の職務はこの家族に於て世襲的であつて、またその公式な呼称は **Stewart** といふ王家の名称となつた。

Robert 二世 (1371—90) の治世は主としてイングランドとの小規模な戦争に占められ、その中で、初めて、スコットランドはフランスから直接の援助を受けたが、それ自体は、イングランド諸王の野望に対する目標となつた。それは彼の宗教改革に當つて、スコットランドがローマの宗教からプロテスタント主義に移つた時、破れたに過ぎないあの仏蘇同盟 (**Franco-Scottish League**) に於ける事実上の端緒であつた。

John of Gaunt による侵入と **Sir John de Vienne** の下、フランス援軍の一隊による出場とその中に於て **Douglas** がイングランドの **Percy** 家一門に対する赫々たる勝利を得た **Otterbourne** (**Chevy Chase**) の合戦とは **Robert 二世** による治世の顯著な事件である。

彼の息子にして後継者である **Robert 三世** (1390—1406) は彼 (**Robert 二世**) の弟で、**Fife** の伯爵・その後三十年間にわたつて、當國の事実上支配者たる **Duke of Albany** によって、影をうすくさせられてゐた。**Buchan** の伯爵 (**the Wolf of Badenoch**) **Alexander** の功績は、その中で **Elgin** の町を大聖堂との焼却と **Inch of Perth** に於けるハイランド閥族二つの闘士達による格闘とがあつて、**Robert** による治世の初年代に属してゐる。

それから、先づ **Albany** とその長男 **Rothsay**

の公爵との間で當國に於て、一つの争闘が次いで起り、そしてその對抗行為が不正な競技であつたといふ疑の下、**Falkland** 宮殿に於ける **Rothsay** の死によって終結した。この地域に於て、またイングランド人とスコットランド人との間に日常的な闘争量があつたのだが、彼ら二つの最も注目すべき遭遇戦が **Nesbit Moor** (1402年) に於いて、そしてまた **Homildon Hill** (1402年) に於て行はれ、そしてそれらの両方に於て、スコットランド人が敗北した。

Robert 三世 の死を前にして、彼の息子にして後継者・後の **James 一世** がその教育を完成するため、フランスへの途上、イングランド人によって、捕へられてしまつてゐた。それ故に、**Robert** が死ぬや否や、**Albany** は摂政に任命され、そして1420年に、その死に至るまでこの國を支配した。スコットランド史上・三個の顯著な事件——1407年はかの殉教者 **James Resby** の火刑と1411年は **Harlow** の合戦とまた1414年はスコットランドに於ける最古の大学 (**St. Andrews** の大学) の創立とが彼の配剤に属してゐる。

Harlow に於ける **Isles** の領主 **Donald** の敗北はスコットランドをケルト族とサクソン王子との間に再び細別されることから救つたのであるが、然しそれら貴族達の間で最も有力なるものによつて、無視された。この王と貴族達との間に於ける闘争は、第十六世紀の終末まで續くのであつて、**James 一世** (1424—37) の治世に於て、明確に片が附いた。

イングランド人に六万マークといふ賠償金を支払ふや否や、**James** は1424年にその故國に復帰させられ、そして直にそれら貴族達の權勢を打ち破ることと王位の特權を拡大することに志向した。その事業遂行に當つて、彼は **Sir Robert Graham** といふ致命的な敵を作つてしまひ、これが **Perth** に於て、王を驚かし、**James** の詩 **The Kingis Quair** (御製集) の中に見られる女王「乳白の鳩」の面前で彼を殺害したのである。

James 一世 によつて達成された恒久的な改革の中で、三つ——成文法令の組織化と「**session**」(高等民事裁判所)として知られる裁判所の設立と議会の決議をスコットランド語による公表とが特に注目に値する。その息子にして後継者たる

James 二世 (1437—60) は父の死んだ時、わづか七才であるに過ぎなかった。その瀕死が法律と秩序とに対しては損害が大であったところのそれら長い未成年期のもう一つが續くのであった。

1449年に、James 自らが支配権を握った時、彼はその資源と大衆感情に及ぼすその威力とによって、Stewart 家の恐るべき敵手である Douglas の大家に自らが対峙しせられてゐるのに気がついた。(その一人を彼は自らの手で、その来客が Stirling の城にゐる間に、殺したのである。) 家族の相次ぐ代表者達と、彼は広い戦地に於て、スコットランドの覇権を争はねばならなかった。その苦闘は、James の勝利と Black Douglas 家の破滅とに終るのであった。James はその家系中で、最も旺盛にして且つ人気ある者達の一人となって見せた。然し、彼はイングランドの侵入に備へてゐる間に加農砲の炸裂によって死んだが、それは齡三十の時であった。それからまた一つの長い未成年期があった。「ばらの戦争」(the wars of the Roses) が始まったばかりであつて、母女王・ゲルデスのマリアは York 家に加担し、St. Andrews の主教 Kennedy は Lancaster 家に加担した。Kennedy の一行は優勢となり、1465年の死に至るまで、短期間ながら、彼は均等なる慎重と幸運とをもって支配するのであった。

事件の指揮に対する争奪が次いで起つたのであつて、これは Boyd 家が当座の支配権を握る結果となった。その十八才をもって、James 三世はデンマーク・ノールウェー・スウェーデン王の娘 Margaret と結婚したが、彼女は Orkney と Shetland との島々をその持参金として持てて来た。

1479年に、James は彼の弟達二人 Mar 伯爵 John と Albany 公爵 Alexander との深刻な口論に巻き込まれた。James は彼らに反乱の嫌疑をかけたので、二人共を突然逮捕し投獄した。Albany は逃亡したが、一つの不幸な偶然の一致によって、Mar が獄中で死んだので、彼の卑劣な行為に出處はしてゐたのであるといふ嫌疑が持ち上つた。

James は、然しながら、(口論の原因となつた) 彼の愛好者達を諦めることが出来なかつたし、またそれら貴族達と一般人民達との不満がつひに或る決定的な行動に於て、現はれた。イングランドの Edward 四世による侵入を反撃しようと1482

年に Lauder で野営をした時、James は彼の最も有力な男爵達に悩まされた。何故ならば、彼らは彼がその愛好者達を追放し、そして彼が、その助言下に於て、流通させておいた低価の貨幣を撤回すべきであると要求したからである。

James は怒つて、二つの條件を拒絶した。そこで、それら御し難い貴族達はそれら愛好者達の大多数を絞殺し、そして James をその伯父 Athole 伯爵の保護下、エジンバラの城内に置いた。追放された Albany はイングランド軍によって支へられ、今は当國の主君となつた。

然し、すでにわがスコットランドの同盟國と口論をしてしまつてゐるので、彼 (James) は再び追放され、そして暫しの後、その口論を諦め、フランスへと引退した。その残るわが治世五年の間に、James は自國からその貴族達を締め出すといふその古い政策をつづけ、そして最後の危期が1488年に到来した。

その法定推定相續人にして後の James 四世については、彼らの中にあつて、それら男爵達から成り立つ同盟國がこの國王に向つて、戦闘を開始したので、國王は Sauchieburn の合戦で、Edward 二世に及ぼした Bruce の偉大な勝利の戦場に敗北させられ、殺害されかかつた。わが父の死に遭つた時、James 四世は齡わづかに十六才であつて、二十二才にして初めて彼は業務を自ら指揮する権力を握つたのである。

その六年にわたる未成年期は國家的大事件二つだけによって明らかにされてゐるに過ぎない。その一つは時の政府に対する1489年の反乱であつたが、それは速かに潰滅されてしまつた。1344年に、Macdonald の大族にある族長達はそれら西部諸島全部に統治権を確立してしまつてゐて、それらを彼らは、スコットランドの諸王に対して、つねに反目しつつも、独立した統治者として、支配した。

かくして、James 三世の未成年期間に於て、伯爵 Ross と Isles の領主とが Edward 四世と秘密條約に入つたが、その目的は Stewart 王朝の排除であり、彼ら王國の武装解除であつた。その偉大な統治権が終焉を告げたのはこの John 自身がもつ人格の中にあつた。その高齢に達すると、彼はその權威をその甥・Lochalsh の Alexander に委

任したが、**James 三世**に対して、その伯父がなしておいたその従順をひどくきらひ、不成功ながらも、旧来の統治権を重ねて主張しようと謀った。

1493年に、Islesの領主に関する失権の宣告を通過させたが、然し、**John**はこれに抗議することが出来なかった。然し、この民族がもつ勢力はそれを潰滅させるため、**James 四世**とその後継者とのあらゆる資源に課税するのには尚充分であった。この王は、その先輩達とは似合はずに、それら貴族達について困難が少しもなかった。彼はそれらエステートの会合を召集することが稀であって、その枢密院を通して統治した。

初めから終りまで、**James**の夢中になってゐる主な問題はイングランドに対する関係であった。かの山師 **Perkin Warback** による主張を信奉して、彼はかの Border (國境) を渡って、一大軍隊を導いたのであるが、然しながら、それはイングランド人達からは何らの支持を得なかった。**James**にとって幸ひなことに、イングランドの國王は平和を好む **Henry 七世**であった。1502年に、スコットランドの國王にその娘 **Margaret** が嫁くことによって、**Henry** はその残る治世中それら二つの王國間に平和を得、そしてイングランドの **James 六世**下に於て、彼らの多事な同盟を確實ならしめた。

1509年に、**Henry 八世**がイングランドの王位についた時、初めから彼と **James** との間に、摩擦があった。國境の紛争がいろいろな誤解を來たした。そして、フランスの盟友として、**James** は **Henry** が **Louis 十二世**に宣戦を布告した時、イングランドに侵入するのに徳義上自身が責を負はされてゐると考へた。その結果は曾てスコットランドの軍隊に降りかかった最大なる不幸たる **Flodden** に於ける1513年の敗北であった。**James** 自身が^{たお}仆れ、そして重要な各家は皆その代表がそれら殺害されたものの中に入つてゐた。

Flodden に於ける不幸は別として、**James** は自身が勢力的にして成功的な支配者であり、また正義の行政に勢力的であることを立証した。西部の高地と諸島とはそれらが以前決して知つてゐなかつたさういふやうな法と秩序との状態に墜ちてしまった。スコットランド海軍の建設とグラスゴー大学の創立 (1495年) と印刷術の導入 (1507

年) とはスコットランド治世中、最も耳目に親しい一つの治世に於ける尚一層差異ある特質事件である。

James の死んだ時、彼の息子にして後継者である **James 五世** (1513—42) はほんの子供であるに過ぎなく、それでその政治は彼の母・イングランドの **Margaret** の手に置かれたが、その気まぐれ奇行はこの國を治世の殆ど末期に至るまで、混乱させた。当初から、彼女は **James 三世**にかやうに多くの迷惑をかけておいたあの **Albany** の息子・公爵 **Albany**・摂政の **John** に呼びかける或る有力な一団によって反対された。**Albany** は1513年にフランスから到着し、そして1525年まで、この摂政権を保持した。

今や初めて、一団が、フランスにとってよりはイングランドにとって、一層有利なスコットランドに發生し、それで **Albany** がイングランドで戦争をしようと努めた時、彼はそれら貴族達の大多数が自分に従ふ意志のないのに気がついた。従つて、彼がその摂政職を辞し、そしてつひにこの國を去つたのは挫折した人間としてであつた。1528年に、**James** はその政治を自分自身の掌中に納めたのである。

彼の初めてする仕事は母女王の第二夫にして **Douglas** 家の長たる伯爵 **Angus** と交際することであつた。イングランドの関心によって支へられてゐるとはいへ、**Angus** は速かに屈服させられ、そして追放されてしまった。**James** は、これら諸島と國境とに秩序を回復することによって、わが決意の尚一層なる立証をするのであつた。然しながら、その父と同じやうに、彼は **Henry 八世**といふ最も恐るべき敵ができた。

イングランドは今やローマ教会と悪化し、スコットランドをわが同盟國として持たうと、曾てより以上に熱心になった。然し、如何なる懇請も彼の相伝信仰からも或ひはフランスとの古い同盟からも、いづれからも **James** を分離させることが出来なかった。**Henry** の憤慨したことには、彼は相ついで、二人のフランス婦人——**Francis 一世**の娘 **Madeleine** と **Lorraine** の **Mary** と結婚した。つひに、戦争がこれら二國の間に勃發した。

然し、彼がイングランドの侵入で、軍隊を召集した時、それら貴族達が、彼はフランスのであつ

て、自分自身の王國の利害関係で、行動しつつあるのではないかといふ理由で、彼に従ふことを拒絶した。1542年に、Solway Moss に於ける彼の軍隊が恥ずべき大敗をしたことは **James** に断腸の思ひをさせ、そして二・三週間後に、彼は Falkland に於て、その幼児 **Mary Stewart** をわが後継として残しつつ、死んで行った。

彼は、その父より以上にさへも、人気のある王であったが、然し彼は幸運な行政人としては彼(その父)に優ってはゐない。然しながら、彼の治世に於ける一つの行為は特に注目する価値がある——バリー議会の模範に基いて、1532年に法科大学を創立したこと。

Stewart 王朝が王位に上ってしまってから、スコットランドの歴史に於ける顕著な事件はこの國王とその貴族達との間に於ける闘争であった。**Mary Stewart** (1542—67) の即位をもって、区画分割といふ新なる根本方針がこの王國に於ける進化の中に現はれ始めたのである。

一方に於ては、プロテスタント主義と共同行為とを以てイングランドを支持するところの一派が発生し、他方に於ては、昔からの宗教とフランスとの古くからの同盟とを保留したいと望む國民の大多数が当初はゐたのである。**Arran** の公爵を知事として任命したことは、その息子 **Edward** とスコットランドの幼い女王との間に於ける結婚を提案するやうに **Henry 八世** を激励するのであった。そして、イングランドとプロテスタント主義との両つながらの傾向をもってゐる **Arran** の政府機関廳を通して結婚條約が1543年に Greenwich に於て、事実上締結されたのである。

然しながら、スコットランド人の大多数にとって、その條約は嫌なものであった。そして、昔ながらの宗教に関する主要な代表 **Cardinal Beaton** (1494—1546) といふ一個の人間として、また一個の聖職として、二つながらその利害関係が現存しつつある秩序に拘束されてゐる闘士が彼らにはあった。**Beaton** のそれら努力によって、そのイングランド條約は廃棄され、**Arran** は國內のあらゆる実権を剝奪され、そしてフランス同盟は更新され、根強く陶冶された。相次ぐ侵略によって、**Henry** は、外交によって獲得出来なかったところの物事を、武力によって強奪しようと努力した。

然し、**Beaton** の指揮下、スコットランドは引き續き頑強であった。

1546年に、**Beaton** が一部はプロテスタントの殉教者 **George Wishart** を処刑したことに対する報復から、**St. Andrews** に於て、暗殺された。**Henry** も亦その翌年死んだ。然し、その抗議者 **Somerset** は、あらゆる犠牲を払って、スコットランドの同盟を求めるといふ政策をつづけたのである。**Beaton** の死は、然しながら、フランスとの締結を強化するに過ぎなかった。**Arran** と **Lorraine** の母女王 **Mary** との間で、この國に於て、初めて一つの抗争が発生した。

この若い女王はフランスへ派遣された。スコットランドへ引き連れられたフランスの一軍は **Somerset** がこの國內に配置させておいたところのイングランド駐屯軍を駆逐した。そして、1554年に、**Lorraine** の **Mary** は摂政にされ、**Arran** は **Châtelherault** の公國をもって慰籍されたのである。今や、あたかもスコットランドがフランスの属國にならうとしてゐるかのやうに——1558年に、フランスの皇太子に **Mary Stewart** が嫁すことによって、尚一層恐らく、その結果として報復される偶発事件になるであらうやうに思はれた。

然し、それら主要なるスコットランドの要塞に於て、フランスの駐屯軍を、また重要な公共官廳に於て、フランスの政治家達を、見ることはイングランドに対する伝承的な憎悪と同じほどに激烈なる感情をフランスに対して漸次起して来るのであった。かういふ感情に、今や旧来の教会に対する募り行く不満が合体したのである。何故ならば、その教会はそれの財産とそれの職權乱用とそれの聖職による一般の墮落とによって、倫理的にまた経済的に、一個の我慢できない組織となつてしまつてゐたからである。

プロテスタントの教義は、健実な、特に一層大きな都市の中流階級間に、地盤を獲得した。その中で、**James Stewart** 卿(その結果として摂政 **Mary**) と **Glencairn** の伯爵と **Lorn** 卿とが有名である二・三の貴族達によって率ゐられて、プロテスタント党はこの摂政に対して、公然と反乱し、イングランドの援助を追求し、且つまた獲得したのであるが、今はプロテスタント派の **Elizabeth** によって支配されるところとはなつたのである。

蘇英合同軍により、Leith に於て、攻圍されたので、仏軍はプロテスタント主義とその國家宗教——つまり、スコットランド階級人達の集会によって、正式に裁可される一個の「仕上」として実質上確立させる一つの條約を受諾するやうに追ひつめられてしまった(1560年8月)。Lorraineの人々は多数この戦闘過程中に死んでしまっていた。それで、1561年8月になって、初めて彼女の娘はその夫 **Francis 二世** を失ってしまっていたので、その故郷へと戻って行くのである。

彼女による實際的な治世の当初四年間は、Huntly の偉大な伯爵の潰滅がその主要な事件(1562年)ではあったけれども、比較的平穩無事であった。**Mary** は Holyrood の教会に於て、ミサを挙げてもらうことの権利を彼女自身とその下僕には保持しつつも、その宗教上の立場を自分が発見したものであるとして、受け入れるのであった。かの古い宗教を打倒することに於ける偉大にして大衆的な指導者であった **John Knox** と彼女が衝突したのはこの点に於てであったのである。

Mary のそれら最高なる助言者達二人 **James Stewart** 卿(1562年に Moray の伯爵となる…)と **Lethington** の **William Maitland** とは、彼ら以前の共謀者から離脱して、その新たなる宗教上の解決を確立することのために、彼ら自身の政策を採用した。この政策は **Mary** をイングランドの王位継承者として認めるやうに **Elizabeth** を説得させることであって、それによって **Mary** は兩國に於て今や確立されてゐる宗教と自分自身を同一視するための優秀なる理由をもつことになるであらうことだった。

Elizabeth は後継者を指名するやうに説得されようとはしなかったし、また **Mary** は1565年にその従兄 **Darnley** と結婚したが、彼は、彼女自身に次いで、イングランド王位に対しては最も近い後継者となり、かくして彼女自身の主張要求を強化したからである。熱情といふものが、然しながら、やがて政策を悲惨な仕事にさせてしまった。**Mary** が見栄を張って、イタリア生れの國務大臣 **David Rizzio** に示したそれら親切な行為に嫉妬をして、**Darnley** はこの寵臣を切り捨てることに對するそれらプロテスタント貴族達の陰謀に加った。

Holyrood の宮殿に於ける **Pizzo** の殺害(1566

年)はそれら王室の同志間に最終的な不和を生じたのである。この事実後に於ける **Darnley** と自分が結婚することを妨げようと努力してしまった時に、彼女が見捨ててしまつてゐた **Moray** と **Maitland** と一緒に、**Mary** は提携して活動することは、もはや出来なくなった。彼女がえらんだこの新しい顧問は **Bothwell** の伯爵 **James** であったが、彼は、彼女の王位を同じやうに分担することに定められてはゐるものの、彼女の助言を分担するだけでは満足しない人物であった。

Darnley が邪魔になった。然し、**Mary** の秘密な協賛を得て、**Bothwell** は、その中で **Darnley** が病床に横つてゐるところのかの館(Fieldの教会)を爆破してしまつたが、その犠牲者は恐らくその爆発が起る以前に殺害されてしまつてゐたであらう。三ヶ月よりもう少し以上の間に、**Mary** と **Bothwell** とは結婚した。然し、輿論は世界の前に、その國家を辱づかしめたところの合同を黙許することはなからうことであつた。

これらプロテスタントの卿達は、**Bothwell** も同時にこの國を抛棄するやうにと強ひられてゐるので、**Mary** にも、**Carberry Hill** に於て降伏するやうに強ゆるのであつた。**Leven Castle** 卿に引き渡されたので、**Mary** はその王位を去るやうに幽閉されてしまひ、そして Moray の伯爵が **James 六世** として、1567年王位に就かしめられるその幼少なる息子の名に於て、摂政に任命された。その翌年に、彼女はその牢獄から逃亡したが、然し、**Longside** に於て敗北させられ、そしてイングランドに避難を求める状態に追ひやられてしまつた。それから、**Moray**、**Lennox**、**Morton** 伯爵らの摂政期間がつづいた。

これらの摂政期間を通じて、1573年まで、國家は國王党と女王党との戦争によって混乱させられ、その過程に於て、二人の摂政達 **Moray** と **Lennox** とは暗殺されてしまつた。その女王党は **Hamilton** 家とそれら偉大なる貴族達の大半とによって支持され、またフランスによつては補助金を與へられた。ところが、王のそれ(党)はそれら一層大なる町々の同情とイングランドの間歇的な援助とを受けてゐたのである。

その闘争はイングランドの補助部隊によって強ひられてゐるので、摂政 **Morton** による **Mary** 党

に於ける最後の要塞エジンバラ城の攻略によって、遂に終決されてしまった。これはスコットランドに於けるプロテスタント主義の勝利を遂に確定するところとなった。**Morton** は1578年にその摂政職を辞したが、それなのに、わが権勢を再び主張しようと努めるに当って、打ち勝たれ、そして1581年に公然と処刑された。**James六世**の具体的な治世と共に、この國に於ける教会並びに政治上の発展に於けるもう一つまた別な舞台が始まるのである。少数ながら、可成ローマンカトリック教徒が尚まだ存在してはいるものの、プロテスタントの定着は今や安全無事と考へられるかも知れないことであった。その後、1688年から1689年まで、この國に於ける非常に吸収的な関心は教会と王権との間に於ける論争であった。

James六世は王達の神的権利といふ彼の固定観念をもって、わが臣下達の財産・身体・靈魂の絶対的な支配者と彼自身をならしむべきである政体の形成をねらったのであった。政体に関するかやうな理想と長老派教会制度とは、それが大多数のスコットランド人に向って、それ自身を推挙するところの信条であり教会政策であったので、根本的に協調することが出来なかった。他方では、監督教会制度が、**James**のそれを想像理解してゐるやうに、彼の政策上に於ける目的を催進するやうにと、みごと採用されたのである。

単なる政府の役員に過ぎなく、彼の勝手に解任され得るであらうところのこれら監督達を通じて、彼は一般牧師職の柔軟性を保証確定することが出来たし、そして彼ら（牧師達）は、今度自分らの番になると、平信徒達の心に一つの相應な方向を與へるやうになるであらうことだった。当初は、**Andrew Melville**とそれら貴族達からなる相当に沢山な党部とによる指導下にあつて、教会はそれ自身を支へることが出来るより以上なものであった。**James**が1603年にイングランドの王となる王権の統一以前に於てさへも、彼は長老派教会制度の勢力を破壊してしまつてゐたし、また監督教会制度を設立するに當つて、相当に多大な前進をなした。

彼は、自分に彼らの支持を進んで與へやうとしてゐる彼らすべてに、教会の土地を自由に下賜することによって、教会からそれら貴族達を分離さ

せることによって、このことを達成したのである。イングランドに彼が移転するや否や、彼はその背後にあるもう一つまた別な王國の財源を入手し、そして彼はスコットランドを漸次に然し確実に、改変させて、属國に過ぎないものとしてしまった。彼がこの國に於けるそれらの業務を管轄するのは、彼自身によって任命されるスコットランドの枢密院を通してのことであつた。

議会は稀にしか召集されることがなく、また彼らが会合する場合も、彼の命令に対して合法的な手續きを取るやうな格好をつける補助的な代表者達によって注意深く詰め込まれるのであつた。1625年に於けるその歿年月日までに、**James**はもはや長老派教会制度を破滅させてしまつてゐて、また國家の上と同じやうに教会の上に完全な支配力を與へる一種の監督教会制度を確立してしまつてゐた。彼はまたかの「高原地方」や諸島やと同じやうに、それら「國境地方」を賞讃させるべき治安の状態にあらしめもした。

その息子にして後継者たる**Charles一世**（1645—49）は父の政策を繼續したが、然し、それを極端にまで押し進めたので、彼は國民の反抗心を刺激して、自分自身の滅亡をもたらした。**Charles**に於ける最初の重要な処分は例の廃止条令（1626—9）であつて、これはその父によって制定された教会土地の下賜を撤回するところとなり、かくして我がスコットランドの臣下達の間はその大多数に上る土地持ち階級の者達を不和ならしめるところとなった。またもう一つ別な処置によって、彼は長老派教会制度の精神を奪起させたが、それはすでに粉碎されてしまつてゐるやうに見えた。

1637年に、**Charles**は一つの新しい礼拝式文を、それが直にそれらすべての教会に於て、採用されるべしとの緊急な命令を以て、下賜させた。大多数の聖職達は、自分らの信徒団による熱烈な支持を以て、この刷新に対して、熱烈に抗議した。この新たなる新禱書に対して、二重の反対が発生した。つまり、それがカトリック教の気味があつたといふことであり、またそれがその名前の離れ得ないやうにその書に附きまゝとてゐる大監督**Laud**によって、大概作られたものであると思はれたからであつた。

Charles は譲歩しようとしなかったし、また **Whitehall** に於けるかの最終悲劇へと通ずるところのそれら事件が敏速に次々とつづいて起ったのである。貴族達は例の廃止條令に不満であり、また公共事件の管理に当って監督達に委託されてゐるそれらの権勢と特権とに憤慨してゐるので、自分ら自身とその國民が抱いてゐる宗教感情とを同一視するのであった。かの國民連盟契約(1638年)によって、國家は長老派教会制度の回復と高位聖職者制度の根絶とを行ふ契約をしたのである。

Charles は、譲歩するどころか、却ってむしろ、その剣に訴へたのであるが、然し、1639年に於ける第一回の監督戦争に於ける結果は、それら契約者達の要求を一々受け入れるやうに自身が強いられてゐるのに気がつくといふことであった。第二回の監督戦争が1640年につづいて起り、そして **Charles** はこのたびも亦自分がその敗北の当事者であることに気がついた。1642年には、イングランドの下院議員達との長い論争が突然に内戦となつてしまつた。それらイングランドの下院がその國民論争にあるスコットランド人達にはすでに同情してしまつてゐたので、1643年の嚴肅同盟によって、両者はその王に対する戦争に参加の契約をすることとなつた。

この協定に入るに當って、スコットランド人達は **Charles** が圧倒されるといふ事件に於て、長老派教会制度の政策が兩國に課せられるべきことになってゐることを理解したのであって、——それを彼らの同盟國が願はないし、またそれを実現するのは事実上彼らに出来ないやうな結果となつてしまつた。スコットランド人達の援助を以て、イングランド議会の軍隊は回復不能なまでに **Charles** の権勢を破滅した。1646年5月に、彼はスコットランド人達の掌中に入つたので、彼らは彼にそれら盟約を承認するやうに説得したが無益であつた。

イングランド議会によってスコットランドが侵略されるだらうと怯え、彼を待つてゐるその悲運に何らの疑念を抱くことがない乍らも、彼らは彼をその手に引き渡してしまつた。三年間、「独立」を抑へ、そして長老派教会制度を確立することを彼に誓約させるところの「契約」として知られる例の「協定」によって、公爵 **Hamilton** が先導す

るスコットランド内にある一隊が國王のためにイングランドを侵略しようと企てた。

Hamilton によって率ゐられるスコットランドの一軍は事実上かの「國境地方」を渡つたのであるが、今度自分の番になると、スコットランドを侵略(1648年8月)するところの **Cromwell** (1599—1658) によって寸断されてしまひ、そしてその主要な指導者がかの偉大なる **Argyll** の侯爵であるところの長老派教会信徒達に屈服してしまつた。1649年1月、**Charles 一世** の処刑六日後に、スコットランド人達は、その息子を國王と宣言し、ついで彼をスコットランドに招き寄せた。これがイングランド議会によって挑戦行為と見なされ、そして **Cromwell** は彼らの行為を中断するために、北方へ派遣された。

Dunbar に於ける彼の圧倒的な勝利(1650年9月)はスコットランド人達にとって、一つのきびしい打撃であつた。然も、翌年の元旦に、彼らは **Scone** に於て **Charles** を國王にさせ、彼を支へてその侵略者に対抗させる準備をした。9月に、**Charles** はスコットランド軍の一隊を率ゐて、「國境地方」を渡つたが、それは **Dunbar** 會議の記念日に、**Cromwell** のために **Worcester** に於て、全滅させられた。そこで、その結果、イングランドの如何なる國王も何一つ——9年といふ期間にわたるスコットランドの完全な服従は、これを決して達成することを出来ないであつた。

1653年の末期まで、この國はイングランドの國家によって、そしてその時から1660年まで、**Cromwell** とその息子とによって支配された。多くの点に於て、この國は、それら土着君主達の誰によってより以上によりよく統治されたのである。イングランドとの自由貿易は商業を刺戟したし、裁判は有効且つ公平に処理され、そして總會の廃止は教会の混乱状態に臨時ながらも一つの阻止を與へた。然しながら、**Cromwell** の支配に於けるそれらの結果中、最も注目さるべきものはスコットランドとイングランドとの議會を統一したことであつて、スコットランドは下院議會の際、**Westminster** に座を占める三十名の議員によって代表されるのであつた。

Charles 二世 の治世(1660—85)当初から、**James 六世** によって確立されてゐた國家・教会の行政

組織を回復することが彼の慎重な政策であった。彼は自分として、その回復後に、スコットランドを訪問するといふことは決してなかったが、四人の引き續く委員達——**Middleton, Rothes, Lauderdale, James**〔Yorkの公爵、後の**James七世**（二世）〕を通して、その國事を処理したのである。議会が召集されると、彼らは、何ら困難を引き起こすことのないやうな議員達を以て、注意深く身を詰め囲まれるのであった。

James六世の治下にあったので、この國を統轄したのは、その國王によって任命された枢密院によってであった。**Charles**が遭遇せねばならなかった最も重い困難は監督制度の回復にあった。大部分の國民はその意気投合に於て、長老教会派的であったし、そしてこれらの同情が制止されたのは唯組織的な心理抑圧によるのみに過ぎなかった。引き續く免罪符によって、或る人々は籠絡されてしまったが、然るに他の人々はその心が科料とか投獄とか、また追放とかによって破られてしまった。

然しながら、南西諸島に於て、如何なる物事もその國民を監督制度に和解させることは出来なかったもので、また二回にわたって、彼らは反逆に立ち上ったが、然し1666年には**Rullion Green**に於て、また1679年には**Bothwell Brig**に於て、絶望的なまでに粉碎されてしまった。この治世に於ける最も扇情的な事件は**大監督Chap**（1618—1679）の殺害（1679年）であって、それは彼が監督制度を確立するに当って、**Charles**の主要な手先であったし、また非國教徒の信仰を支持するために、その粘り強い努力によって、自身を嫌はれ者とならしめてしまつてゐたからである。

James七世（二世）〔1683—1701〕は公然たるローマン・カトリック教徒であった。彼の初年（1685）は宗教拒否（国教忌避）者達に対する特別に厳格な取扱で顯著となり、そしてその第二年にはその國も自分自身の宗教に改宗させようとの企図が始まった。ローマン・カトリック教会に反対する刑罰の法律はこれを議会が廃止しようとする要求が冷やかに受理され、そして、イングランドに於けると同じやうに、彼は自分が認可しないやうなさういふ法律を無効にする権利を、それに

よつて主張する「特免権能」に対する反還請求権をもつてゐた。

わが政策にこの國を従はせるため、彼はプロテスタントとローマン・カトリックとの非國教徒に相等しく免罪符を與へるのであったが、然し彼の窮極目的は決して誤解されなかった。公然と彼は自分自身の宗教に係るそれらのもの達と改宗者になることに彼の寵愛を求めるところの唯三人であるに過ぎない大法官（**Perth**）と二人の國務大臣達（**Melfort**と**Murray**）とをその枢密院に配置させるのであった。1689年3月に、一つのスコットランド議会在エジンバラに於て、召集された。そして、それは**James**がその王位を「豫謗」（**for-eFAULT**）しておいたといふことを公式に宣言したので、そのことを連帶統治者としての**William**と**Mary**とに申し出したのである。

Williamの治世（1689—1702）全期を通じて、彼によるスコットランドの統治は最大なる困難をもつて包囲された。それら貴族達の中、精々二人又は三人の忠誠には依存することが出来た。それら監督教会の牧師達と彼らを寵愛するところの者達全員が多かれ少かれ彼の公然たる敵であった。また高原地方に於ける首領達の大多数はその追放されてゐる王のため、何時でもその剣を抜く用意をしてゐた。**William**の下に座を占めるスコットランドの議会在に於ける第一会期中に監督制度が廃止され、そして第二会期中に長老教会派制度がその然るべき位置に据えられた。

信仰箇條の上院議員として知られてゐる委員の廃止によって、議会はそれがそれら最後になる**Stewart**家三人の下にあることになつてゐる唯単なる「男爵御前會議」であるにとどまつた。**William**治世に於ける当初の幾月かの間に、スコットランドに於ける彼の政府は**Dundee**子爵の下にある「高原氏族」の反乱によって、脅かされてゐた。然し、**Killiecrankie**に於ける勝利（1689年）の折節その指導者が死んだことは**Stewart**家の大義名分に致命的なものとなつた。然しながら、**Glencoe**の大虐殺（1692年）はかの**Jacobite**党にもう一つまた別な機会を與へてしまつたが、それといふのは、國の内外いづれに於ても、その革命定着といふものに不信を抱かせるため、根氣よくそれを使ふことであったからである。

このほか William とイングランドとによる通商上の嫉妬に主として帰せられる Darien に於ける植民地の破滅は、今や一世紀に亘って存在してゐる関係の断絶を脅し想はすそれら二國間に於ける疎遠を來たしたのである。Anne の治世（1702—14）が開始した時に、「安全條令」によるスコットランドの階級人達（Estates）が自分らは同等なる交易特権に係る條件にもとづいてのほか、彼らに君臨しようとして、イングランドの統治者をもつことはなからうと、宣言した。

一層緊密な同盟が兩國のためには必要であることを当時の政治家達に確信させたのは、その疎遠が苦々しくあることそのことであった。それで1707年に、この同盟が、イングランドとスコットランドとの議会が併合することによって、一個の代議政体となるまでに達成された。スコットランドに於て、当時不評判であつたとはいえ、この同盟から生れた結果は兩國に於ける國民に、その協定が兩國の福祉に適合してゐるのであると、次第に確信させて行くのであつた。

ここからして、スコットランド史の主要な興味は、その歴史が1715年に於ける Jacobite 党の反乱と1736年に於ける Porteous の暴動と1745年に於ける第二回の Jacobite 党の反乱との如きかやうな絵にも似た事件によって多様な形相にされてはゐるけれども、この國に於けるそれら社会的、通商上、そしてまた知識上の發展に於て見出されることが出来る。その最後たる暴動の平定によって、それら「高地」は遂に平穩に帰せられ、そして「低

地」の前進して行くところの文明と一致するのであつた。

かの「四十五年」につづく國史に於ける崇高な一章はかの「ダンドスの暴政」（1783—1809）として知られてゐるものであつて、その間に、この國は Melville 子爵 Henry Dundas によって支配される Tory 党に完全なる政治上の従属状態にあつた。この Tory 「政体」に対抗して、勢力的な國民感情といふものが次第に發達してゆくのであつて、それは1802年に設立されたかの「エヂンバラ評論雑誌」の中に表はれ、そして1832年に於ける「改革目録」の結果として、かの政権が「Tory」党から彼らの政敵「Whig 党」に移転した。

國家の資源に於ける發展と彼女（蘇國）が交易と製造との種々なる部門に於て發揮してしまつてゐるところの盛大なる精力とによって、スコットランドはそれの当然なる比率より以上多くを連合王國の資源に貢獻してしまつてゐる。植民地の擴張に於て、彼女は一つの特に顯著な役割を演じてしまつてゐる。その海浜から來た移民達はカナダ・ニュージーランド・オーストラリアの諸植民地に於ける最も榮達した開拓者達となつてゐる。それに、また發祥をスコットランドとする卓越した植民地の管理者達は國家の努力と企業との顯著なる証據として、注目されてゐる。

実践的・純理的な理念の範圍に於て、スコットランドは、それ自身がその政治に関する協同者に対する一個の立派な相手であることも立証してしまつてゐる。